―　望郷　―

ふるさとのメルヘン

長澤　幹

一本の鋭くつきでた神社の森の梢が
ふるさとの夕暮れの空を刺したように
その背に沈んだ太陽をうけて真紅にそまっている
夕焼けの空の透き通るような激しい紅は
老木に覆われた神社の森が神秘と畏怖と
そして虫の鳴くことさえ許さぬ威厳をたたえて
高くそびえる神の館のシルエットを映している
その山裾を大河が悠久の郷愁を秘めてゆるやかに流れている
流れに沿って列車が重く長い汽笛を夕闇に響かせ
遠く太陽が沈んだ山端をめざしている
対岸の山頂には今は使われていない長い煙突が
暮色の天空へたどる階段のように立っている

あれから長い時間が経とうとしている
箒をさかさに並べたような山々の木々にかすかに緑が走り
土手の黄色い枯草の中からちいさな若芽が首をかしげていた
降るような陽の光りはあるが
空がかすんで太陽がどこにあるのか判らない
川の流れと鳥のさえずりだけが聞えるのどかな昼さがり
無心に枯草をむしりながらつんと長いまつげをまばたかせ
時折思い出したようにくまれ口を言うお前の
あの言葉のなまりがたまらなく可愛かった
無邪気だった頃のお前と俺のおとぎ話のような美しい
水色のかすみの中に消えていった想い出が…
またそんな季節がくると涙の出るほどなつかしい

―　鎮魂　―

あいつ

長澤　幹

一、あいつがいなくなったのは
　星の見えない夜だった
　何も言わずにだまって消えた
　あいつの後姿が目に浮かぶ
　肩をゆすって歩く背中がなつかしい

二、あいつは低くつぶやいた
　誰もきいていなかった
　ひとの不幸をひとりで怒る
　あいつの心はあたたかかった
　お酒を飲むと熱いあいつが見えてくる

三、あいつはなぜかもろかった
　いつも強さをよそおって
　優しさかくして叱るように
　あいつの話は厳しかった
　かげろうに浮かぶあいつはどこにいる

四、あいつと一緒に過ごした
　貧しいけれど前を見て
　寂しさと悲しさを胸にいれ
　あいつと二人でみつめてた
　そんなあいつを今も夢で手探りしてる

不来方慕情（こずかたぼじょう）

長澤　幹

春

一　夕暮れの中の橋
城跡の杉の梢
紅い空を突く
欄干越えの残雪の山
何度か見た風景
手のひらのぬくもり今恋る

二　さざめく中津川
祭りの太鼓の音が
胸を揺さぶる
軽やかに手を振る姿
瞼に揺れる微笑み
かえらぬ面影むなしく想う

夏

三　花のない石割桜
木枯らしに舞う枯葉
前ゆく細い影
つい振り向く習い癖
幻の夢をたどり
過ぎたうつろい誘う涙

秋

四　白雪舞う八幡町
古い町並みに灯る
ネオンの明かり
細い路地ちいさなスナック
飲めない酒に振りをする
ほのかに赤い頬寂しく浮かぶ

冬